

見えないファイル

岡本俊弥

男は、古いパソコンを集めるのが趣味だった。

気軽な出張があると、無理に時間を空けてでも、秋葉原や日本橋の電気街を回って中古品を探し歩いた。昔は、有料セミナーに参加したり、展示会を見学する機会が結構あった。

しかし、世の中が変わり、余裕のある出張はほとんどなくなった。

「展示会ですか、目的は何ですか。情報収集というけど、あなたのいまの仕事でどういうメリットが得られるんですか。申し訳ないけど、会社の今の状況ではね、効果がない、勉強のための出張は認められない。分かっていますか。そういう無駄なことをする暇があったら、自分の仕事の効率を上げる工夫をするように」

たまにある業務出張でも、宿泊は許されなくなった。地方都市からでは、日帰りするだけでやっただ。

やがて、男は社外に出ることのない部署に異動となり、職場と自宅とを往復するだけになった。

リストラの対象年齢になると、びくびく怯えながらの毎日だった。雇用が売り手市場なのは若い社員だけで、会社の平均年齢を超える中高年層は整理の対象なのだ。

たとえ利益が出ていても、数年ごとに人員整理があった。人件費はばかにならない。人を削ると一時的でも利益が増える。不安定な営業収入よりも確実なのだ。その味をしめると、止められなくなる。

それでも、男は年に数回は自腹を切って電気街を回った。

行きたびに街の様子は変化していた。家電からゲームやアニメ、アイドルと主流は移り、客層も同じではなくなった。ただ男の目的にする店は、規模や形を変えながらも残っていた。

男が買うのはパソコンだ。電子工作するほどのスキルはなかったが、非合法すれす

れの雑誌記事を読んで、ゲームソフトをコピーしたり、ジャンク基板を組んで、バラツクのシステムに灯を入れるのが面白かった。ただハッキングの知識が追い付かなくなると、男のできることは減っていった。

デスクトップの時代が終わり、ディスプレイ一体のノート型が増えた。

個人向けのコンピュータは、せいぜい三〇年ほどの歴史の間に、めまぐるしく世代が変わった。流通形態も、大きく変化してきた。

昔、パソコンは設備だった。事務機器の大型複写機やファクシミリと同等の扱いだった。設備では税金が発生するし、資産管理や減価償却の手間がかかる。変化の速いパソコンには不向きな扱いだった。やがて、毎月の経費で落とせるリースになった。調達する台数が多い大手企業ほど、管理の楽なリース品に変わっていった。

そうなつてから、三年か五年を経たリースアップ品ばかりが、中古市場に流れてくる。個人の持ち物はネットで売られるようになり、店頭では減ってきた。店にあるのは、会社から払い下げられた、何世代か前の機種が主流だ。筐体や画面が割れたり、キーボードがすり切れたぼろぼろのもの、動作しなくなった故障品があったり、使わ

れた跡がほとんどない新品同様のものまである。値段は状態相応だ。

だが、男が必ず訪れるのは、画一的な商品の並ぶ表通りの店ではない。

「面白いものが入ってるぜ」

店主は、男が来ると、まるで毎日顔を合わせているような調子で声をかけてくれる。誰にでも同じなのだと思いますが、男も悪い気はしなかった。

「CPU評価キット8000だ。ありきたりなTK80とは違うぜ。ザイログのZ8000が載ったボードなんだけどよ、たぶん世界でもこれだけしかない。製造数量が少なかったし、それに16ビットCPUのキットは珍しいしな」

古びた箱に入ったA4サイズほどあるボードを指した。見慣れないムカデのようなセラミックパッケージのLSI周辺に、メモリやディスクリイトICの周辺部品がびっしりと実装されている。

「Z80のボードなら知ってるけど」

「そいつの16ビット版だ。どうだ掘り出し物だろ」

「あまり聞かないCPUだな。Z8000のパソコンってなかったよね」

「なくはない。まあ日本じゃほとんど出回らなかつたがね。主にはサーバーだった、ゼウスとかな。結局、インテルやモトローラよりバグ取りが遅れたのが致命的だったな。モジュール化なしのフルスクラッチ設計で、Z8001は仮想記憶のハードも持ってた。早めにできていればと思うと惜しいよな。サーバーはうちじゃ入らない。だから、こういう動く様子が見えるボードは貴重なんだ」

「うーん、分かるけど、OSとかないんだろ。おれはアセンブラとか機械語直打ちとかはしないし、マイコンボードは苦手だな」

「そりゃ、残念だ」

店主はにこにこ笑顔を浮かべたまま、悪びれたようすもなく言った。

「OSということなら、DRDOSはどうだ。後から出たバージョンじゃなくて、最初のやつだ。もちろんGUIなんてないが、アスキー文字でグラフィック風の動きを作ったりして、工夫されている。まだデジタルリサーチに勢いが残ってた頃だな。じきにMS-DOSにやられちゃうが」

「あいかわらず絶滅種好みなんだ、もう残ってないものばかりだろ」

「絶滅と言っても、痕跡くらいはあるさ。そういうのがいいんだ。ネアンデルタールの遺伝子みたいなもんだ」

男と店主はそういう雑談を毎回した。半年の空白があっても、昨日の続きのように会話が成り立つのが不思議だった。

その日男は、棚に刺された古いパソコンを見つけた。

古いといっても、店主と話していたほどの骨董価値はない。液晶のディスプレイが載ったウインドウズ時代初期のものだ。

「こいつはもともと、ウインドウズ2.0だか3.0だかが動いていたはずだ。3.1じゃないぜ。だから、実用性は低かったと思うよ。どっちにしても、今は起動しなくなっているからジャンク扱いの値段だ」

とすると、少なくとも三〇年前だ。

「それにしてもスリムで格好いいな。見たことないし、これを買うよ」

今でも通用するくらい細身のパソコンだった。重くもないし画面もそれなりに広い。解像度は不明だった。ふつうなら目立つメーカーやブランド名すらない。古いデザイ

ンだったが、どことなく親しみがわいた。ラベルが貼られた跡があった。リース落ちにしては古い機種と思ったが、いつからリースでパソコンを扱いだしたのか、男は正確には知らなかった。

ジャンク扱いでも、ちよつとしたおまじないで起動することがある。よく知られたバグなら、特定の呪文で復活できる。ドライバのバージョンアップだけで動いたこともあった。物理的故障でも、フレキが外れているくらいならラッキーだ。しかし古いうえにマイナーな機種ではノウハウ自体が少ないし、マザーボードの電子部品が死んでいる可能性がある。

男は、スペックの近いありあわせのACアダプタをつなぎ、起動ボタンを押したが、通電ランプすら点灯しない。

回路図の読み方も分からず、中途半端なスキルしかない男にできることは少なかった。実装部品の故障だとすると、何れにしてもお手上げだった。

そのパソコンは一週間いじったあげく、ガラクタ入れのダンボール箱に突っ込まれることになった。

そのすぐあと、会社で厭なことがあった。

男のケアレスミスが原因だった。

パワハラが問題になって以来、社員のいる大部屋での叱責はめったにない。管理職も、自分の評点に影響することは避ける。晒しものはなくなったが、代わりに、面談と称して別室に呼び出される。

上司は、巧妙に言葉を選んでいたが、男の仕事の手順を何度も何度も問いただした。執拗だった。居心地は悪かった。今後気をつけますと言う以上の、ケアレスミス防止策などない。男は黙って聞いていた。

その夜、男は動かないパソコンを引っ張り出した。

裏面のビスを外すと、内部が露出する。いまどきの一体成形ではないので、注意すれば大抵のパソコンは分解できる。ハードディスクは、もう見かけないIDEで容量は1ギガに満たなかった。今の1000分の1以下だが、当時としては大容量だろう。

パソコン本体は無理でも、IDEをUSBに変換するインターフェース基板を使えば読めるかもしれない。ワープロや8ビット時代ほど古くないので、ファイルシステ

ムには互換性があるはずだ。

基板とメインで使用しているPCをつなぐと、ディスクは問題なく認識された。

古いハードディスクを買って、解読するのを楽しみにしていた時期がある。

裏通りの店に行くと、壊れた古いパソコンから、ディスクだけを取り出して安く売っている。セキュリティが甘い頃は、中身がそのまま読めるものが結構あった。

デスクトップ画面にあるごみ箱にファイルを棄てる、ディスクをフォーマットする。そうすれば、確かに消されたように見える。しかし、不法ともいえない簡単なツールでアンデリートできる。

社外秘とある会社の機密書類や、個人名などが書かれたワードファイル、経理ソフトのデータ、誰かが写したポートレート、何かもわからないぶれた写真や、家族の写真、ポルノやコピーソフトなど、いろいろなものが出てきた。パスワードが一覧で書かれたエクセルもあった。読んでも価値が不明のビジネス契約書や、銀行口座番号まであったが、男には使いようがない。盗みではないのだ。他人の作ったものを、そつと覗くのが楽しかった。

今ならOSのセキュリティ機能でデータの完全消去ができる。中古店でも、消去をかけたものしか売らなくなった。ツールくらいでは何も出てこない。面白みが薄れてから、ディスクを読むこともなくなった。

ただ、このPCのディスクは取り出された形跡がない。何か、レトロなデータがあるかもしれない。

確かにファイルはあった。一つのファイルだけだった。他にはディレクトリも何もない。

DOSの時代でもディレクトリ構造くらいはある。これが古いウィンドウズの起動ディスクなら、`config.sys`とか`autoexec.bat`などのファイルと、システムファイルが入ったディレクトリがあるはずだった。これでは、たとえ通電したとしても起動しない。

どういふことなのだろう。

DOSのディレクトリもない。最初期のPCは、まずグラフィックUIを持たないDOSが起動し、その後ウィンドウズを立ち上げるのだ。

それなら、何のファイルだろう。

拡張子が.COMということはDOSの実行ファイルなのか。どちらにしても、テキストではないのだから、読むことはできない。不用意に実行したくないが、ネット以前のパソコンならウイルスもないだろう。ただ、こんな昔の実行形式が今も有効なのだろうか。

まあ、いいか。どうせ動かないだろう。

男は深く考えずに、ファイルをクリックした。

すると、ファイルを表示していたエクスプローラーのウィンドウがいきなり落ちた。ディスクのアクセスランプがいそがしく瞬く。いつものような、実行の可否を問うメッセージは出なかった。

まずい。

男は、タスクを表示しようと焦ったが、そうしている間にアクセスランプは落ち着いた。

外付けディスクの中身をあらためて見たが、何も変わっていない。

どういうことだ。

だが、よく確かめると、PCのデスクトップに見慣れないアプリが登録されている。自動解凍するインストーラーだったのか。何が入ったのだろう。

名前のないアイコンがあった。アイコンのデザインは粗く、描かれたものが凶形なのか文字なのかもよく分からない。

動かしてもいいものか。

一瞬迷ったが、男はクリックしていた。ふだんなら、後のめんどろをを考えて躊躇したかもしれない。今日はどうでもいいように思えた。

たいしたPCではないし、ジャンクファイルばかりで、盗まれて困る情報もない。誰に迷惑をかけるわけでもない。

いいじゃないか。最悪、OS再インストールになっても構わないだろう。

すると、小さなウィンドウが立ち上がり、それ以外の画面は真っ暗になった。タスクバーもアイコンも何も見えなくなった。おそろおそろマウスを動かしても、マウスカーソルが出ない。

なんなんだ。

ディスプレイの六分の一、VGAくらいの黒い画面に、カーソルが点滅している。何かアルファベットが現れた。間を置かず長い文字列がスクロールし、次々に現れてくる。スクロールというより、一行単位の動きだ。最下行が文字で埋まると、一行分上に送られていく。文字は白抜きではなく緑色だった。

文字だけのスクリーンはめったに見ない。面白半分に試してみたりナックスが、起動終了するとき一瞬見えるぐらいだ。それも流れすぎる様子を単に眺めるだけで、理解しているわけではない。

自分には中途半端な知識しかないと、男は自覚している。DOSの時代を実体験で知らないから、コマンドを手入力するCUIの画面にはなじみがないのだ。

画面がブラックアウトする。

その中央で記号が点滅している。ピクセルを粗く組み合わせで作られた図形のようなだった。図形はさまざまに形を変えながら、膨らんだり縮んだりしている。

これは見たことがあるな。ライフゲームに似ている。

セル・オートマトンというものがある。簡単なルールで動くある種のロボットだ。セルが分裂しながら生き物のように領地を増やし成長し、限界を迎えると死ぬ。ライフゲームは、それをコンピュータで実現したものだ。前世紀の七〇年代に考案され、世紀末頃にはパソコンでもさまざまな種類が作られるようになった。四角い格子がセルを意味し、キャラクタだけのグラフィック画面でも動く。今でも、スクリプト言語で書かれた新作を見かけることがある。

よく似ている。

男自身も、初期のPCで動かしてみたことがあった。何しろ簡単なプログラムなので、非力なPCでも問題なく動いたからだ。ただ、模様が消長するだけの地味なグラフィックは、男にとって面白みに欠けるものだった。

だが、これは似ているといっても同じではないようだった。最初に現れたコロニーが、ごくわずかずつしか成長しないのだ。

男はしばらく眺めてから、理解するのを諦めた。

明日も仕事がある。とりあえずシャツダウンしよう。

カーソルも出ないのなら、何れにしても通常の手順で閉じることはできない。男はスイッチを長押しして強制的に切った。復旧できるかどうかは分からない。

気晴らしになると思って始めたが、どうにもすすきりしなかった。素性を中古屋の店主に聞くにしても、もともと保証外のジャンクの話だ。

男は腕組みして、茶色に焼けた畳の上に積み上げられた中古品を睨んだ。

翌朝、男は定刻に起きて、会社に出勤した。

小声で朝の挨拶をする合間に、上司の顔色を伺った。無表情だった。とりあえず、遅れた仕事を進めようとしたが、男の割り当て分はもう別の担当に振られていた。しばらく待っても上司は無言のままだった。

時間を潰すという意味で、会社の大部屋でできることは何もない。

ネットはイントラに制限され、社外宛のメールにまで、いちいち上司の裁可が必要だった。最近はやばいな、男は焦った。これからどうなるのだろうか。

じっと座ったまま時間を過ごすのは苦痛だった。それでも定時までにはなんとか我慢

した。

このままだと、後がなくなるかもしれない。

男は不安を感じながらも帰宅した。無意識にPCを起動する。

すると、昨日打ち切ったはずのウィンドウがまた表示される。

もうだめか。

OS画面で立ち上がらないとなると、システムそのものが壊れているのだ。修復ディスクも作っていないし、もう入れ直すしかない。

むだな買い物だった、あと先を考えない自分のせいだ、と男は思った。

ところが、今日の表示画面は緑一色ではなかった。赤や青など、原色のセルが増えていた。

昨日と違うのか。

男のデスクトップPCは、バッテリでバックアップされてはいる。切ってしまったら、メモリに何かが残ることはない。勝手にレジュームなどできないはずだ。

こいつは自分で昨日のデータをセーブしたのか、それとも初期条件が変わったせい

なのか。

見ていると、もう一つ小さなウィンドウが立ち上がった。こちらはファイルマネージャの画面だった。ただ、古いバージョンのものだ。いくつかのディレクトリが見えた。ディレクトリには名前が全くついていない。文字化けで見えなくなっているだけかもしれない。

これが、もともとのディスクの中身なのか。

すると、今回はマウスのポインタが動くのだ。ディレクトリの一つをクリックする。その下にもファイルがある、いくつもある。このファイル名はでたらめなアスキー文字でできている。拡張子はどれも.txtとなっている。テキストファイルなのか。

もともとのウィンドウズOSの下で動いているのなら、メモ帳を立ち上げて中身が読めるかもしれない。メモ帳の文字コードはバージョンによって違うから、必ずしもそうとは限らないが。

先頭にあるファイルをクリックする。

改行の多い文章が表示された。ファイルマネージャを表示している文書ファイル画

面は、小さすぎて読みにくかった。だが、少なくとも文字化けはしていない。ふつうに読めるようだ。

男は途中から、拾い読みしてみた。符牒や略語らしい単語が並ぶ文章は、もうずいぶん昔のものだった。やがて、その一つに見覚えのあるハンドルネームをみつけた。

これは、あのフォーラムではないのか。

インターネットが始まって、それ以前のパソコン通信のサイトにはたくさんユーザーが残っていた。どこともつながらない閉ざされたコミュニティながら、固定メンバーが付いた、個性的な掲示板があったからだ。回線がデジタルになり、時間課金からパケット単位の課金に変わり始めても、テキストだけの通信は安上がりだった。

男はそこで、一人のユーザーとトラブルになったのだ。

ある書き込みの文章表現を揶揄ったあと、ささいな言葉尻をとらえた言いがかりをつけられた。それ以来、男が意見を書き込むたびに、粗雑な言葉の応酬になった。議論ともいえない、寒々しい口論だった。

何を書いたのか覚えていない。フォーラムの主催者に諫められたが、自分が咎めら

れる理由が分からなかった。結局、男はフォーラムを除名処分された。

何行かを読んでみた。自分が書いたことも相手が反論している内容も、矛盾だらけだった。中身のない、空疎な喧嘩なのだ。

そうだ、あの頃は、何かえたいの知れない怒りや、わだかまりが自分の中で渦巻いていた。だから、一つの単語、言葉の切れ端にも、悪意があると意図的に誤解した。遅いモデム経由のダウンロード画面を睨みつけ、相手の名前が見えるだけでいちいち反論した。反論というか、どうでもよいことにまで過剰反応したのだ。

だが、男は当時の不愉快な記録など残していない。

これはフォーラムのアーカイブなのかもしれないが、男の発言部分だけを抜き出すなどあり得るのか。まるで自分でバックアップしたように。

男はファイルを閉じた。

次もテキストファイルだった。

何行にもわたって、改行のない文字がびっしりと詰め込まれていた。

数行読んで、男はじつとりと汗が滲むのを感じた。

これは十数年前に、男が書いた会社の資料だ。エクセルだかワードだかで、レイアウトに苦勞した新製品開発のための資料だった。そのテキスト部分だけが、改行もななくベタで入っている。

製品は社外の研究所との共同開発だった。その研究所の担当者に、男は何度も恥をかかされた。表立って対立したわけではない。基本技術は向こうにある。会社は指導を乞う立場だ。男は担当者の指示で実験などの作業をしていた。しかし、ささいな間違いも許されなかった。実験がうまくいかないと、当てこすりのような嫌味を言われた。

男は、資料の末尾でその担当者に対する批判を書いた。それも当日資料を差し替えて、研究所関係者や上司がいるところで発表したのだ。謝罪は上司だけで済まず、会社の幹部まで巻き込んだ。明らかかな不祥事だった。

なぜ、そんな大人気ないことをしたのか。思い出すたびに、いやな汗がでてくる。男は誠こそまぬがれたが、大きなマイナス査定を付けられた。

会社のこんな資料がまだ残っているはずはない。いや、こんなふうに社外のデイス

クにあるはずがない。

男は不気味さを覚えた。

そうだ、おれはパソコンを店頭で買った。店頭で買ったものに偶然おれの関係するファイルが入っているわけがない。理由があるはずだ、誰かが入れたのだ。

あの店主が知っている可能性はあるだろうか。

何を話したのか、どんな話題があったのか、そもそも会社の話をしたのか、個人的なトラブルを口にしたのか。いや、長い付き合いといっても、そんな話はしたことはない。

次のファイルには、男が学生時代に書いた論文が入っていた。その論文は大学院の卒業研究に書かれたものだった。締め切りが迫っても、男のシミュレーションはうまく収束しなかった。男は実験結果をつじつまが合うように書き換えた。追い詰められたときの焦燥感が蘇ってきて、息苦しくなる。だが、当時の論文は残っているとすると紙のコピーしかない。なぜファイルがあるのだろうか。

次のファイルは、数年前のものだった。ユーザに提出した品質不良のレポートだっ

た。理論をでたらめに組み合わせ、もっともらしく体裁を繕っただけのものだ。何も言われなかった。その程度のものであったのだと男は思うことにした。以降は、ごまかしを繰り返した。やがて何件かに指摘が出て、男の仕事は信用されなくなった。今回と同じだった。

厭なものばかりがある。意図的に集められたのだ。何の目的がある。貶めたいのか。脅すためか。いや、自分にそんな価値はないだろう。

かいた汗が冷たくなった。男はどす黒い怒りを感じた。なぜそんなことができたのかわからないが、わからないからこそ怒りが深くなった。

ファイルの末尾まで見て、男は新しいディレクトリが作られていることに気が付いた。まだ生成されているのだ。

最初に作られたウィンドウではコロニーが膨らんでいた。ウィンドウのサイズは小さなままだが、解像度が高まっているようだった。一つ一つのセルが小さくなっていく。

こいつが作っているのか。どうやってか知らないが、どこからか掘り出してきて、

ファイルを生成しているのか。仕組みが分からないが、ネットかどこかにすべてが隠されているのかもしれない。採掘すればいくらでも出てくるのかもしれない。

男は裏蓋を外され、机に置かれたままのパソコンをもう一度手に取ってみる。初めて買ったノートパソコンもよく似た外観だった。いや、これとそっくりだったかもしれない。

男はキーボードを叩いてみる。ああこんな感じだった。

だが、そうだとすると、なぜ買ったときに思い出せなかったのか。

そうだ、と男は急に気が付く。

このパソコンはあの日、無くなったのだ。会社で叱責されたあと、男は帰宅した後、上司が通る道路で待ち受けていた。家は離れていたが、車で通る通勤経路は知っていた。深夜遅く、男は車の速度が落ちるカーブで待ち受けていた。柵の奥で埃をかぶっていた古いパソコンは、重りにしか使えない「文鎮」だ。文鎮なのだから、そういう使い方をしよう。

車のフロントガラスに向けて投げつけた。

だが、それならなぜここにあるのだろう。上司はどうなったのか。いやあれはいつのことだったのか。昨日か、今日か、いやもう十年も前のことなのか。